

# 自由保育と課業的な行いのかかわりについて —土粘土での制作活動を例にして—

## Relationship between Voluntary Activities and Theme Activities -Examples of Production Activities Using Pottery Clay-

新垣 理佳

千葉大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻修士課程修了

この小論では、自由保育を掲げる A 幼稚園において、課業的な行いを保育実践の一部に取り入れることの意味について、土粘土での制作活動を例により考察を行った。課業的な行いで土粘土の素材特性を経験的に知っている子どもたちには、自発的な遊びにおいて、自分のイメージを実現したいと考える際に、その素材として土粘土を使う選択肢が子どもに生まれていることを指摘した。また、土粘土は子どもたちにとり、身近で親しみのある素材で、土粘土を用いての制作は子どもたちの自発的な遊びからも発生するが、素材特性を認識するには、土粘土での制作を課業的な行いに導入することが必要である。そして、課業的な行いで得た経験は子どもたちの自発的な遊びの発展の可能性を高めるが、そのテーマを見出すには、子どもたちの自発的な遊びを充分に観察しなければならない。そのような自由保育と課業的な行いのかかわりを螺旋状につながる関係と結論づけた。

キーワード：素材選択肢、土粘土制作、陶芸、自由保育、課業的な行い

### 1. はじめに

小論は、自由保育を掲げる A 幼稚園において、課業的な行いを保育実践の一部に取り入れることの意味について、筆者新垣の修士論文<sup>1</sup>（以下 06 論文と呼ぶ）の再考察を行うことで明らかにしていくことを目指すものである。

この小論の対象となる A 幼稚園は、千葉県市川市に位置する学校法人幼稚園である。筆者は当該園の教師である。当該園は、上に記したように、自由保育の保育理念に基づき実践が行われている。一般的に自由保育とは、「子どもの自由な活動を尊重する」という保育理念に基づく保育である。<sup>2</sup>と考えられている。自由保育を理念として実践を行っている幼稚園の中には、保育時間の全てを各々の子どもたちの自由を尊重する時間と考えている園もあるが、当該園では、一斉的な行いや課業的な行いも不定期ではあるが保育時間内に取り入れている。

ここで取り上げる土粘土での制作活動（以下土粘土制作とよぶ）とは、当該園の課業的な行いの中の一つの活動である。当該園の土粘土制作活動については、当該園の保育実践を体系的に記述した 06 論文の中の陶芸制作の項でも考察を行った。本稿では、06 論文で得られた結論に、2006 年度の土粘土制作活動に関する実践を例

としてさらに加え、土粘土制作の再考察を行うことにより、自由保育と課業的な行いのかかわりについて考えていく。

### 2. 当該園の土粘土制作活動概要（06 論文より）

#### 2.1. 当該園の自由保育と課業的な行いの捉え方

06 論文では、「当該園での、課業的な行いは、保育室で学年一斉に行われる、絵画制作などの制作活動や、歌を歌うなどの音楽活動に見ることができる。加えて、担任教師もしくはフリーの教師の下、1 度期 3~4 名、内容によっては、1 度期 7~8 名の子どもたちを対象に、制作を行うことも意味する。」<sup>3</sup>と記した。

つまり、まず当該園における「課業的な行い」とは、自由保育を理念とする当該園において、子どもの自発的な展開に即して流動的な形態をとる遊びが、子どもたちが園で過ごす時間の主軸となっているなか、それに対して、教師がある時間の過ごし方に対して一つのテーマを提案し、ある程度一斉的に行う活動であると定義することができる。

06 論文では、自由保育において課業的な行いを取り入れる意味について、その端緒には、当該園教師の「この子にこのような経験もさせてあげたい」という思いや、

「この子にこのことも知ってほしい」という願いがあることを指摘した。

したがって、当該園の自由保育とは、一斉的活動形態や課業的な行いも、その経験が子どもの生活を豊かにするのに有効であるならば、積極的に取り入れている保育であるといえる。次節では、課業的な行いの具体的な場面において、教師の願いがどのようなものであり、その課業によって子どもたちの経験にもたらされたものがどのようなものであったかを、土粘土制作を例として述べる。

## 2.2. 土粘土制作活動がもたらしたもの

土粘土制作活動は、先に 06 論文で「課業的な行い」の例のうちに挙げた小グループで制作を行う活動の一つである。

まず、このような活動を行うことの根幹には、当該園が制作に用いる土粘土という素材に関する、以下のような考え方がある。ひとつは、「子どもが自由に表現する制作を可能とする素材」であり、もうひとつは「伝統工芸という伝統的な手法を用いて制作を行う素材」であるという捉え方である。

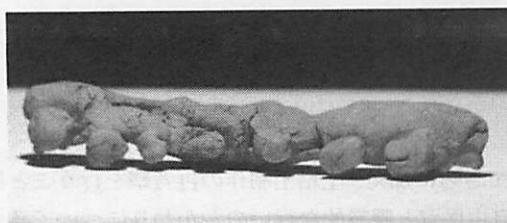


写真1 電車(三歳児 自由に表現する制作)

そこで、年中・少の時期においては、一つ目の「子どもが自由に表現する制作を行う素材」という側面を主眼として土粘土を用いることが多い。年長児においては、二つ目の「伝統的な手法を用いて制作を行う素材」という側面を念頭に置いて、縄作り<sup>5</sup>やタタラ作り<sup>6</sup>などの伝統的手法を学びながら、植木鉢やビールカップなどの制作活動を行うという、課業的な行いを実施してきた。

素材としての土粘土が持つこのような二つの意味合いを考えつつ、課業的な行いとしての土粘土制作を当該園は取り入れてきたが、その経験によって子どもたちにもたらされたものについて、06 論文では以下の二つの考察を述べた。一つは完成した作品がもたらす子どもたちの心的な変化であり、二つ目は、子どもが制作を経験することによって子どもたち自身の遊びの幅を広げていくという「活動」の変化である。

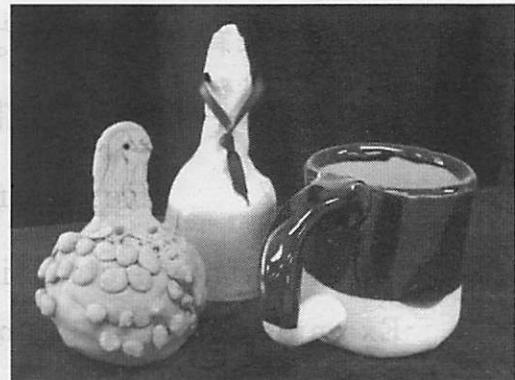


写真2 伝統的な手法を用いて制作した作品

一つ目の、子どもたちの心的な変化とは、課業的な行いが、クリスマスや母の日などのイベントと関連付けた「家族へのプレゼントを作ろう」という形式や、「園で使う自分たちの食器を作ろう」という形式によって提案されていることと関連が深い。完成した作品が、園生活や家庭生活という日常の場面で実際に使用できるということは、子どもたちにとって「本当に使える物を作った」という大きな喜びとなる。家族や自分が毎日使う「本物」のものを作り上げたという喜びから生まれた自信は、子どもたちにとって、次なるものを制作する意欲の源泉ともなる。このように、作品を生活の中で実際に使うということは、子どもたちに大きな意味をもたらすという考えが、当該園の制作活動の基礎となる考え方である。つまり、課業的な行いといえども、何かの技法的な達成をその最終的な目的におくのではなく、そこで得られた経験が子どもにもたらす喜びや自信といった心的な影響の側面が、教師の願いのなかに意識されていたという点を強調しておきたい。

上記のような制作活動の経験により、土粘土という素材は、子どもたちに身近で便利な素材として認知されるようになってくる。その結果として、「活動<sup>7</sup>」の中で、子どもたちに「それは土粘土で作ろうよ」という言葉が出てくるようになる。それが、二点目として挙げた「活動」を成立させる経験としての意味合いということになるが、06 論文ではその例として、2003 年度の恐竜博物館での「活動」を挙げた。それは、恐竜に関心を持った子どもが恐竜を土粘土で制作したいといい始めたことを発端として、実際にそのように制作し、より多くの子どもたちを巻き込んで、たくさんの土粘土製の恐竜を展示する恐竜博物館の「活動」にまで発展するものであった。また、当該幼児たちが、年中少の子どもたちを招いて土粘土を使った恐竜制作のワークショップが行われるという場面も見られた。この例においては、課業的な行いで得た土粘土制作の実体験が、子どもたちの自発的な「活動」の幅を広げる（遊びのバリエーション的な展開と、ひとつの遊びを深めていく集中の両面で）など、良い意味での刺激となっているといえよう。この例に見

られるように、課業的な行いとはそれ自体が一定の達成すべき目標を独自に持つものではなく、子どもたちの自発的な「活動」がより深まっていく手助けとなるような経験となってほしいと、当該園の教師たちは願っている。

以上のように、当該園では、子どもたちが自ら喜びや自信を感じることや、自ら遊びこむことの幅を広げるための経験の一つであってほしいと願うことから、課業的な行いを自由保育のなかに取り入れているという結論を 06 論文で得てきた。

### 3. 2006 年度の保育から

06 論文は、2005 年度までの保育実践が研究の対象であった。この章では、2006 年度の保育から、当該園にとって印象的であった 4 つの場面を「エピソード」として記述する。一見断片的なシーンに見えるかもしれないが、これらのシーンにどのような意味が見いだせるかという考察については、次章でまとめて述べることとする。前半のエピソード 2 つ (A, B) は年長児の長期にわたる大掛かりな「活動」であるお店屋さんごっこにおける土粘土使用の場面であり、後半の場面 2 つ (C, D) は、園庭で子どもたちが土粘土(陶芸用に用意する粘土ではなく、自然に地中に存在する粘土質の土壤)とかかわる場面に着目したものである。

#### 3.1. エピソード A 恐竜博物館

進級して間もない頃のことである。怪獣好きの CA(Child A) が、「先生、ゴジラ作りたいから粘土ちょうどいい。」と、保育室にあった紙粘土を手にした。CA は、紙粘土での怪獣制作が進むにつれ、「乾いたら、シッポが折れちゃった…」、絵の具で色を塗っても「なんかゴジラと違う」など、紙粘土という素材の限界に起因するさまざまな問題に直面した。「じゃあ、ゴジラを作るのにいい素材、一緒に探そうか」という TA(teacher A) の誘いに CA もうなずき、園内に保管されている素材をあれこれと吟味して歩いた。いくつかの候補素材を見てまわったが、TA が「じゃあ、これは?」と「土粘土」を見せると、CA は「そう、これこれ…」と、微笑を浮かべた。その CA の表情は、CA が自分のイメージに合う素材を見つけた表情であったと TA は解釈した。それから数日間、CA は保育室の片隅で、「上手く、ゴジラ立たないな…」などと言いながら、土粘土による怪獣制作を黙々と続けた。

CA の怪獣制作の様子を見ていた、周囲の子どもたちは、次第に「僕も作りたい! 僕は恐竜が好きなんだ。」「僕も僕も…。恐竜好き!」「先生、土粘土ちょうどいい!」と言い出した。数日すると、恐竜図鑑を参考に、恐竜と怪獣作りにはげむグループができてしまったほど、多くの子どもたちが本活動に関心を示した。

2 学期になり、折しも幕張で「世界の巨大恐竜博 2006」が開催されていたこともあり、「博物館にしようよ。」「お庭に化石を発掘しに行こうよ。」「アンモナイトも発掘したいな…」などのアイディアが次々に子どもたちから浮かんだ。当該幼児たちは、園庭で、「恐竜の歯」や「アンモナイト」の化石発掘に挑戦したが、来る日も来る日も発掘しても思うモノは見つからなかった。するといつしか「土粘土で作ろうか…」という話に当該幼児たちはなり、土粘土での化石作りも始まった。

12 月になるころ、「私たちの博物館に、おみやげ売り場がほしい。おみやげをつくろうよ!」という話が当該幼児たちの間ででてきた。「おみやげは…、恐竜の足跡の形のクッキーがいいよ。」という提案をした子どもに、「クッキーなら、土粘土でつくろうよ。」という当該幼児たちの話し合いが成立し、制作素材として土粘土が採用されることになっていった。

そして 3 学期になり、当該幼児たちは幕張の「巨大恐竜博」に展示されていたジオラマを撮影した写真を目にした。「これ、作りたいよ!」という声が子どもたちの中から出た。子どもたちは、木の板の上に紙でジオラマを作り始めたが、「なんか違う…。」「紙だからかな…?」「きっと、地面みたいに本当の土で作らなきゃダメなんだよ。」「お部屋の中に土?」「土粘土は?…」「そうそう、土粘土で作って、焼かないの。そしたら、これに似てる。」という話になり、ここでも、「土粘土」は制作素材として子どもたちに選ばれた。



写真 3 ジオラマ作り

#### 3.2. エピソード B キッズテレビ

1 学期のことである。ある子どもたちの間から、自発的にテレビ局の「活動」が始まった。そのテレビ局は、「キッズ テレビ」と名づけられ、実際のデジタルカメラを子どもたちが使用し、CM や歌番組を制作していた。

2 学期になったある日、子どもたちは「アニメ番組も作りたいな…」というアイディアを語るようになった。「年少さんの部屋から ドラえもんの人形を借りてきてさ…、その人形を動かして…。それをカメラで撮るの。」という考えを示した当該幼児たちは、早々に撮影にとり

かかった。「人形の大きさぐらいの、どこでもドアを作んなきや。」「ドラえもんとのび太くんのおうちもいるよ。」と、小さなセットも当該幼児たちは制作し始めた。当該幼児たちが手がけたアニメ<sup>9</sup>の第一話「海へ行こう！」という番組は、「おうち」や「どこでもドア」を紙で制作し撮影が行なわれた。

2学期の終わりごろ、「やっぱり、おうちは2階建てがよかったな…。」「2階建て…。紙で作るとヘナヘナしちゃって、おうちがつぶれちゃう。」「もっと硬いもので作らなきや…。」「硬いもの…？」「土粘土がいいよ…！」という話の流れに当該幼児たちはなっていった。そこで、子どもたちは「土粘土」で陶製のおうちを制作し始める。しかし実際に制作してみると、2階建てを作るのはなかなか大変であることに子どもたちは気づいた。何度も「土粘土」を積み上げてみると、どうしても1階部分がつぶれてしまうという結果になった。結局、子どもたちは2階建てを断念し、平屋建ての陶製のおうちを完成させた。

### 3.3. エピソードC 泥ダンゴ作り

泥でダンゴのような球体を形成する泥ダンゴ作りは、一般的に、多くの幼児期の子どもたちが行なう遊びであると認知されている。当該園においても、泥ダンゴ作りを、年少児から年長児までの多くの子どもたちが自発的に行っている。

当該園で継続的に泥ダンゴ作りを行なう子どもたちには、各々の発達の段階や興味に即した固有の課題があることがうかがえる。それらの課題とは、泥ダンゴが綺麗な球体になるよう形状にこだわりをもって制作することであったり、ダンゴの表面を長時間手で研磨することにより光沢を与えることであったりする。また、雨どいなどで作ったコースにダンゴを転がす遊びを行なうため、小さくて硬い泥ダンゴを制作することを課題とする子どもたちもいる。

5月のある日、園庭で泥ダンゴ作りを行う年長児たちに、TB (teacher B) は「何してるの？」と声をかけた。すると、2名の子どもたちは、直径 2cm 程度の小ぶりの泥ダンゴを教師に見せながら、「ダンゴ作ってるんだ。ほら、きれいでしょう。」と答えた。TB が「きれいだね～。私はこんなにきれいにダンゴを作れないわ。CB(Child B)ちゃん、CC(Child C)ちゃん、すごいね！」と話すと、「作り方、教えてあげるよ。」と CB がいい出した。その CB の発言につられるように CC も、「そうそう、あそこの土がいいんだよ。あの穴の奥のほうには土粘土があるんだ。」と話を進めた。CC の発言に補足するように CB も、「土粘土で作ると、硬くてきれいな丸のダンゴができるんだよ。」と発言した。

小さくて硬い泥ダンゴを制作する子どもたちの活動は、断続的ではあったが、3月の年度末まで1年間見る

ことが出来た。また、本活動は6月から9月ころまで、「土粘土発掘隊」や「地質調査隊」と子どもたちが名づけた、土粘土を園庭のさまざまな所から採取することを専門とした活動も、泥ダンゴ制作と並行して行なわれた。

### 3.4. エピソードD 男の子たちのケーキ作り

6月のある日のことである。年長の男児 5~6 名が砂場で砂遊びを行っていた。当該幼児たちの行なっていた砂遊びとは、プリンカップに水を含ませた砂をいれ、皿にプリンカップをひっくり返しそのカップを取り上げプリンの形をした砂を作るという遊びであった。当該幼児たちは、プリンの形の砂のかたまりをいくつか作っていたが、次第に、使用する器をプリンカップからバケツへ替えていった。そして、バケツの形をした砂のかたまりを、当該幼児たちは、バースデーケーキに見立てた。また、当該幼児たちは、砂のかたまりをバースデーケーキに見立てたことにより、その上部に、既存のバースデーケーキのようなデコレーションを施したいと考えた。そこで、園庭に育つミントの葉を摘み、砂のバースデーケーキの上部に装飾を施した。その様子を、実践者 TA は次のように話した。「女の子たちが、砂で作ったケーキの上に、花びらなどで装飾する姿は頻繁に見られますが、男の子たち、それも年長の男の子たちが、そのような遊びを行うことは珍しく、この子どもたちの遊びを意識的に見守っていました。」このように、当該活動は、子どもたちの珍しい様子として教師の意識下にあった。しばらくすると、「先生、ケーキ食べてよ」と当該幼児たちは教師を遊びに誘った。「いただきま～す。美味しいね～。」などと語らいながら、教師と当該幼児たちの遊びは続いていたが、「お昼だよ～。お弁当にしよう。お片付けしようか…。」という声が園庭に響き渡り、当該活動を当該幼児たちは一旦中止せざるを得なくなつた。すると、「先生、このケーキ、壊したくないよ。取っておいていい？」と当該幼児たちはいいだした。TA は、「いいよ、壊さなくても。でも、もしかしたら、早くお弁当が終わる年少さんたちが間違えて壊しちゃうこともあるよね…。」と、現状のまま午後まで保存ができない可能性について当該幼児たちに話した。

昼食を終えた当該幼児が園庭に出てみると、TA の言葉通りのことが起きていた。子どもたちが制作した砂のバースデーケーキは、崩れてしまい原型を留めてはいなかつた。すると、子どもたちは、「どうしたら、とっておけるケーキができるかな…？」「年少さんが間違えて触っても、形が崩れないもので作らなきやだめなんだよ。」「だったら、土粘土は？」という会話を始めた。当該幼児が、この場面で使っている土粘土という言葉は、前節で記述した、園庭で採掘できる土粘土を意味していた。

翌日、当該幼児たちは、園庭で土粘土を採掘し、再びバースデーケーキの制作にとりかかった。しかし園庭で採掘できる土粘土の量は少なかった。加えて、土粘土でダンゴを制作している子どもたちから「ずるいよ～。そんなに取っちゃ！」という意見が出て、採掘された土粘土の全てをバースデーケーキ制作に使用することは困難な状況でもあった。すると子どもたちは「土粘土がいっぱいいるね。」「土粘土？」「先生、土粘土って、あの土粘土と同じ？年中さんのときに先生と作ったケーキとかの土粘土<sup>10</sup>と。」という思考の展開に子どもたちはなっていった。「そうだね、同じだと思うよ。」とTAが答えると、子どもたちは、「先生、土粘土ちょうどいい。」といいました。TAが「土粘土」を子どもたちに差し出すと、子どもたちはその「土粘土」を使用し砂場でバースデーケーキ制作を続行した。しかし、再び制作途中で作品を壊されてしまうというハプニングが起きてしまう。度重なる困難が起こる制作状況下で子どもたちは、「土粘土は、砂よりも硬いけれど、ずっと置いておいたら壊れちゃう。」「どうしたら、壊れないケーキができるのかな？」「土粘土でも壊れちゃうのか…」と再び考え出し、「あっ、焼けばいいんだよ。もっと硬くなる。先生、焼いて！」と発言するに到った。

上記の子どもたちの制作した土粘土のバースデーケーキは、さまざまな理由により実際の焼成は不可能であった。しかし、子どもたちは、園庭から保育室へと場所を変え、年度末までケーキ作りの「活動」を行なった。

#### 4. 子どもたちにとっての土粘土という素材

前章で描写したエピソードはどれも、子どもたちが自分たちで何かをやりたいと望み、そのためのアイディアを自分たち自身で次々にふくらませていった場面に着目している。どの場面でも、子どもたち自身の「こんなことがしたい」「こんなものを作つてみたい」「楽しいことをもっとおもしろくしたい」という気持ちがまず初めにあり、その気持ちを出発点として、さまざまな活動が展開していることにまず留意してほしい。

子どもたちが何かをやりたいと思ったときに、子どもたちは自分たちのそれまでの経験をもとに、それを実現する方法を思いつく。本章では、子どもたちが自分たちのアイディアを実現しようとする際に、土粘土とかかわる経験がどのような意味を持つかについて考察する。

##### 4.1. 子どもたちが実現したい質感

エピソードAでは、「恐竜を作りたい」という子どもの望みがすべての活動の始まりになっている。この年には大規模な恐竜博が開催されていたが、2003年度も、恐竜博が開催されていたと筆者は記憶している。両年度とも、恐竜を制作したいと子どもたちが考えたとき、そ

の制作素材として土粘土が選択されている。土粘土を焼成した素焼きの質感が、子どもたちがイメージする「ごつごつざらざらした硬い恐竜の皮膚」の質感のリアルさを感じられるものであったことが考えられる。2006年度のエピソードAでは、子どもたちのアイディアはさらにふくらみ、「石のように硬い化石」や「こねて焼いて作るクッキー」などの質感を実現できる素材として、土粘土が選ばれている。



写真4 アンモナイトの化石（陶製）

エピソードBのキッズテレビの「活動」においても、セットのおうちを制作する際、その素材に土粘土が子どもたちに選ばれた。当該幼児たちは、木工の経験も豊富である。セットのおうちを制作するにあたり、木材をその素材として選択してもおかしくない。しかし、当該幼児たちが土粘土を選ぶ背景には、「セットは小さなサイズである=細かな細工が容易にできる素材」という理由があった。当初、紙を素材として選択していることを見ても、「細かな細工が容易にできる素材」を探していた様子がうかがえる。しかし、紙を使うことによっては、二階家を作りたいという子どもたちの願いは実現できなかつた。そこで、「セットは小さなサイズである=細かな細工が容易にできる素材」「2階建ての家を作るには、2階部分の重みを支えられる1階部分の耐久性が必要。そのような重みに耐久できる素材=硬い素材」という2つの条件を挙げて子どもたちなりに考えた結果、その要件を満たす素材として「土粘土」が選ばれたようだ。

この二つのエピソードからは、子どもが質感としての硬さ（恐竜の皮膚、化石）や、実際の強度としての硬さ（二階建ての家）を表現したいと思うときに、それを実現する素材として土粘土自体の特性が認識されていることが見て取れる。細かな細工に耐えられる可塑性をもち、それが焼成という工程を経ることによって硬い質感と耐久性のあるモノに変わるという、一連の土粘土の素材特性を体感できる陶芸の経験がないと、このような場合の素材の選択肢（以下素材選択肢と呼ぶ）として焼き物を思いつくことは困難であろう。

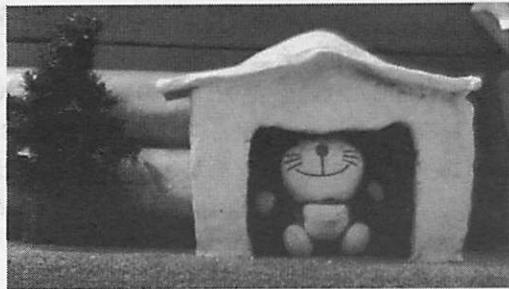


写真5 ドラえもんのおうち

#### 4.2. 課業的な行いと経験を得ることの意味

子どもたちにそのような素材選択肢の多様化をもたらす役割の一つとして、当該園の課業的な行いを捉えることは可能であろう。

06 論文では、「恐竜を制作しようと子どもが考えたとき、土粘土を選択するという発想が子どもたち自身から出てきたことからもうかがえるように、子どもの『活動』に、陶芸制作活動は、予め素材選択や質感表現の幅を広げる何らかの作用をもたらしていた」<sup>11</sup>と考察した。エピソードAについても、同様の考察が可能であろう。課業的な行いの土粘土制作活動において、土粘土の可塑性と焼成による耐久性の効果を経験的に知っている子どもたちは、何かを「作りたい」と望んだ際に、それを実現できる素材選択肢を豊富に得ているため、アイディアにより豊かなひろがりが出てきたのではないだろうか。すなわち、課業的な行いで得た経験が、子どもたちの自発的な「活動」の幅を広げていたと考えることができるかもしれない。

課業的な行いの意味を考えるときに重要なのが、このように子どもが自分の手で「作りたい」と思う気持ちに対して、素材選択肢や実現手段の幅を広げるような経験としての意味合いである。

上記A、Bのエピソードにおいて子どもたちが作りたかったものには、「硬さ」が求められていた。実際は、ドラえもんのおうちの一階部分が二階部分の重みに耐えられずつぶれてしまっていたり、恐竜も足の長い姿にしたかったはずが、完成したときにはつぶれてしまって短くなってしまったりしている。このような結果を見るとき、焼き物の強度を上げる以下のような伝統的技法をもし子どもたちに提示していたら、と悔やまれてならなかつた。

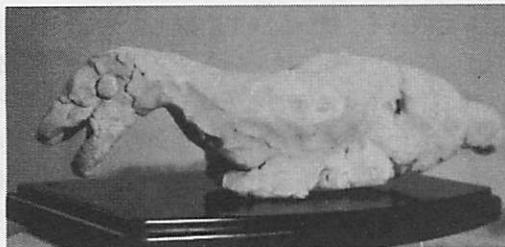


写真6 恐竜

それは、縄作りの技法にも見られる技である。巨大な花器などを制作するときなど、匠は下から縄状の粘土を積み上げていってある程度の高さになると、そこで一度作品を乾燥させる。その後に積み上げていく縄との接続部分に当たる最上部だけは水分が蒸発しないよう濡れた布を掛けておく。土粘土は乾燥させることにより強度が増す。土粘土に一定の強度が得るまで乾燥をさせた後、制作を再開し、水分を保持した接続部分に新たな土粘土を積み重ねていく。このような技法の繰り返しにより、陶芸の専門家は、巨大な作品を制作する。

子どもたちが実現不可能だとあきらめてしまうような試行錯誤の過程に、教師が上記のような手法<sup>12</sup>を提案することで、できなかったことが実現する可能性も考えられる。もしも伝統的な手法が有効であるとすれば、子どもたちから「これがしたいけどやり方が思いつかない」というボールが投げられたときに、「こんなやり方もあるよ」と提案できる教師の引き出しの一つとして使われる場面である。なぜなら、そのような手法はそもそも生活上の必要から生まれ、先人の知恵によって洗練された「ある種の解決策」であるからだ。だとすれば、子どもが何かをやりたいと強く思ってその方法を知らないとき、それにふさわしい解決策として何らかの伝統的な手法がある場合には、それを提示することは、子どもたち自身の表現への欲求にとって必要な経験となるであろう。

当該園における課業的な行いのうちに伝統的な手法のプログラムが取り入れられていることには、そのような意味合いがある。しかし、2006年度子どもたちが、「それは土粘土で作ろうよ」と発言した場面に焦点をあてると、伝統的な手法を用いて制作を行う素材としてのプログラムが、直接的に生かされている場面が一つも存在していなかった。子どもたちが自発的な活動で生み出すさまざまなアイディアに対して、それを可能にするためにふさわしい技法が見当たらなかったということになるのだろう。教師は、子どもたちが「こういうことがしたい」と語るさまざまなイメージの核心にどのような望みがあるのかを敏感にキャッチして、それを可能にするような経験として課業的な行いのプログラム内容をデザインする必要があると反省される。

#### 4.3. ドロンコ遊びから土粘土へ

前節では、課業的な行いにおける土粘土制作の体験が子どもたちの活動にもたらすものの意味について考察した。それは、子どもたちの素材選択肢を増やし、つくりたいもののイメージをより豊かにすることによって、子どもたちが主体的に行う活動の幅を広げるものであると言うことができよう。

しかし、2006年度のエピソードとして示したCやDの出来事を注意深く見ると、子どもたちが土粘土を使い

こなすにいたる発達過程は、必ずしも課業的な行いによるものだけではないことが指摘できる。

エピソード C に示した泥ダンゴ作りは、年長児の遊びを年中少の時期から見ている環境において、子どもたちどうしの関わりのなかで自発的に伝承されていく遊びである。泥ダンゴ作りの遊びを熱心に行なう年長児の中から、「土粘土の発掘」や「地質調査」などの活動を行なう子どもたちが出てくるのは例年のできごとといつても過言ではない。そのような環境で年中・少時期生活をしていた当該幼児たちにとり、土粘土という素材が地中に存在しているという認識が生まれたことは、遊びの伝承からきていると考えることもできる。

また、当該幼児たちは、泥ダンゴ制作を熱心に行なうことにより、砂や泥という素材の延長線上に土粘土という素材を認知した可能性も多い。子どもたちにとって砂や土で遊ぶことは、ごく自然に好まれることである。そのことについて、06 論文では、当該園創立者の村谷の言葉を引用し、子どもと土粘土という素材の関わりについて次のようにまとめた。

「特に、村谷が陶芸制作において拘っていたのは、土粘土という素材にあったようだ。村谷が書き記した文章に、次のようなものがある。『砂場での遊び、それに水を加えたドロンコ遊び、これは風光水土をたっぷり味わえるものです。抑圧からの解放として、心理療法としても使われています。焼き物粘土…砂場で子どもたちの作ったものは、消えてしまいますが、この粘土で焼成したものは半永久的に残ります。この陶器は幼児の生活の活動にはたいへん有効です。』」<sup>13</sup>

ここに引用した村谷の文章からは、陶芸の原点にはドロンコ遊びがあるという直感が村谷にあったことが推測される。村谷の直感が正しかったであろうことは、エピソード D において子どもたちの遊びが、砂から園庭の土粘土へ、さらに陶芸用の土粘土へと素材を変えていったことからも見て取れる。すなわち、土粘土とは、子どもたちの自発的なドロンコ遊びで親しまれる経験によって、子どもたちが自由に扱える素材となっていくものであると言うことができよう。

エピソード D では、形成した形を保つことのできる硬い素材を探そうとする子どもたちの姿を見ることが出来る。

そのような硬い性質のある素材探そうとするとき、子どもたちは自発的な泥ダンゴ制作の経験で、雨どいのコースを転がっても壊れない素材である土粘土の丈夫さを体験的に知っている。これらの経験が、年中・少で得た土粘土制作という課業的な行いでの経験と結びつき、焼成によって最終的な強度を実現しようという工程を

子どもたちが発想するに到ったと考えられる。

エピソード D では、園庭における制作という一時的な遊びのみならず、完成した作品が形を留め、その作品を利用してさらに二次的な遊びが発生するということがここに生じている。子どもたちの活動が継続して発展することを可能にしたのは、土粘土の素材としての耐久性であり、子どもたち自身が焼成の経験によって得た耐久性に関する知識であった。先の引用で村谷は、焼成によってドロンコ遊びから生まれたモノが「半永久的に残る」ことの重要性を指摘しているが、このような幼児の遊びの「継続」＝「遊びこむこと」が、子どもたちの育ちに重要であることについては、06 論文で既に示した。

#### 4.4. 課業的な行いと自発的な遊びの重層的関係

ドロンコ遊びという子どもにとって身近な行為が、課業的な経験と結びついたとき、子どもたちの生活はさらに豊かになるのではないかという村谷の直感を、もう一つのエピソードを挙げてさらに検証してみたい。

##### 4.4.1. エピソード E 幼児の素材認識の違い

3月のある日のことである。放課後、当該園の園庭に、他園に在籍している 5 歳児の CD(Child D) が訪れた。CD は、当該園の園庭で、テラコッタ粘土を素材とし繩作りという手法で園児が制作した植木鉢の一片、長さ 5cm 程度の細長いかけらを手にとり、そのとき園庭に居合わせた TC (Teacher C) に、「これは何？」と質問をした。その CD の問いに TC が答える前に、TC と行動を共にしていた当該園の 3 歳児 CE(Child E) が「粘土だよ！」と答えた。すると、CD は「違うよ！ 黒板に書くものだよ。」と、粘土では決してありえないという自らの見解と共に仮説を発言した。その CD が発言した「黒板に書くもの」という言葉を補うように、TC は「チョークのこと？」と CD に聞いた。すると、CD は「そう、チョーク」と答えた。

##### 4.4.2. 素材特性は経験によって認識される

エピソード E は、子どもの素材感が、その生活環境によって違ってくることを示していると考えられる。CD は 5 歳児ということもあり、自らの生活経験の中で、植木鉢という物は認識できていたと考える。しかし、植木鉢は土粘土で制作し焼成されて完成するものだという認識を CD はしていなかったと考察できる。

CD の在籍する B 幼稚園（学校法人園）では、子どもたちは砂場での砂遊びは行っているが、土粘土を使用した陶芸制作は行なっておらず、粘土制作といえば油粘土が素材として使用されている。したがって、CD は、土粘土という素材に対する認識がなかったうえに、CE の発した「粘土」という言葉からも油粘土しか想像することができなかつたと思われる。

土粘土が、砂や泥遊びの延長線上で自然に出会うことのできる素材ということがいえるとしても、幼児では、地面を掘り返していると少し色の違う固まりのような土が存在するという認識が限界ではなかろうか。すなわち、土粘土がどんなに子どもたちにとって身近な素材であっても、子どもたちは自力のみでは、粘土を焼いて硬くしたという、既成の植木鉢と土粘土の関係を認識できない。このような認識が可能になったのは、課業的な行いなどの体験が影響していたと考えられる。

## 5. 結論：「作りたい」気持ちをかなえる経験

2006年度のエピソードの細かな側面に注目すると、子どもたちの素材認識の発達やアイディアの広がり、活動の継続的な展開に対して、課業的な行いで得た経験は密接なかかわりをもっていることがわかる。

いつもその始発点には子どもが自発的に「やりたい」「作りたい」という気持ちが先にある。もしもそのとき、その気持ちをかなえるための具体的な方法や知識が子どもたちのそれまでの経験になかったとき、子どもたちの気持ちはそこでしぶんでもしまうことになるだろう。当該園での課業的な行いとは、そんな子どもたちの気持ちに実現の道筋を与え、さらに新しい「やりたい」アイディアが広がるような可能性を与えるものであると考えている。そのためには、課業的な行いをデザインする際に、教師が重要であると考えるテーマであっても、子どもの生活や遊びから生じる真剣な要請とかけ離れたものであれば、何ら意味のない知識や経験となる可能性が高い。いいかえれば、子どもの自発的な遊びを尊重するだけでは、子どもたちには不自由が生じ、子どもたちの生活や遊びの文脈上からかけ離れたテーマの課業的な行いばかりを行っても意味を満たしていない。

したがって、課業的な行いのテーマは、子どもたちの発達に即し、子どもたちの生活や遊びと深くかかわりを持つものでなくてはならない。子どもたちにとても身近なテーマであっても、自発的な遊びから自然に習得することが難しいテーマもある。そのようなテーマを課業的な行いのテーマとして選抜すべきであろう。だが、そのようなテーマを見出すには、子どもたちの自発的な遊びを充分に観察しなければならない。その観察によって、子どもたちが生活の中で思い描くさまざまな発想をキャッチすることなしには、それをかなえるために、そしてその発想そのものの幅を増やすために、どのような課業的な経験が必要かを考えることは、そもそも成り立たないのである。

つまり、課業的な行いを子どもたちの日々の暮らしと切り離して、個別の達成目標を設定したプログラムとして扱うことは当該園においては意味を成さない。このような自由保育と課業的な行いのかかわりとは、螺旋状に

つながる関係であると結論し、本稿を締めくくりたい。

<sup>1</sup> 新垣理佳 『幼児教育における「仕事」の時間のカリキュラム開発～芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム～』 千葉大学教育学研究科、2006年

<sup>2</sup> 田代和美（森上史朗 編）『保育用語辞典』ミネルヴァ書房、2000年、P100

<sup>3</sup> 新垣理佳 「幼児教育における『仕事』の時間のカリキュラム開発～芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム～」 千葉大学教育学研究科、2006年、P118

<sup>4</sup> 子どもの遊びは、形成・発展・分離・融合などの形態があると当該園では考える。

<sup>5</sup> 繩作りとは、土粘土を細い縄状に伸ばし、その縄状に伸ばした粘土を、土台となる平べったい粘土の上に積み上げて器を作る手法。

<sup>6</sup> タタラ作りとは、土粘土でシート状の平板な板をいくつもつくり、そのシート状の土粘土を加工していく手法である。当該園では、タタラを作る機械があり、教師がタタラを作る作業は行い、子どもはシート状に出来上がった粘土を加工することから始める。

<sup>7</sup> A 幼稚園における「活動」とは、子どもの「遊びこむ」姿や「やりとり」を行う姿を目指して、教師が援助を継続的に行うことによってかかわりをもつ子どもの「遊び」＝「生活」であると06論文では定義した。

<sup>8</sup> ジオラマを意味している。

<sup>9</sup> 絵が動くアニメーションではなく、ぬいぐるみを動かす実録の番組を子どもたちはアニメとよんでいた。

<sup>10</sup> 既製品としての土粘土を意味している。

<sup>11</sup> 新垣理佳 『幼児教育における「仕事」の時間のカリキュラム開発～芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム～』 千葉大学教育学研究科、2006年、P121

<sup>12</sup> 強度を上げる伝統的な技法はいくつもあると考える。本稿では、一例として乾燥の技法を示した。

<sup>13</sup> 新垣理佳 『幼児教育における「仕事」の時間のカリキュラム開発～芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム～』 千葉大学教育学研究科、2006年、P118